



季節の作業

九月中
十月中



九月に入ると北国の果樹も本格的な収穫の時期になる。市場競争の激しくなつた今日では、着色状態あるいは除袋時の日焼などによつて思わぬ損害をこうむることがある。今回は収穫に当つての注意事項を主にして述べることしよう。

除袋と日焼

りんごの収穫を前にして、十分注意してかからねばならぬ問題である。

(1) 除袋の時期 りんごの有袋栽培では、収穫の一定期間前に除袋して光線に当てなければ着色して来ない。この着色に要する期間は品種の早晚によいかなり差がある。晩生のは気温、日焼等の関係から、着色に長時間を要する。また一般に「青りんご」と呼ばれている、祝、ゴールデンデリシャス、印度、陸奥等は濃厚な着色を要しないからその期間は短くてよい。但し一部にこれ等の品種を除袋することなく収穫し、本当の青りんごのまま出荷する方法が行われている地方がある。しかしこれは決して推奨されるべき方法ではない。一見如何にも「ウラ成」的な感じを与え、しかも皮が薄いので傷み易く、輸送力が劣るのである。

ある。生産費軽減の立場から、無袋栽培が提倡されている今日、全く時代逆行的な方法であると考えられる。

濃厚な着色を必要とする品種中、旭は二〇日前後、紅玉、デリシャス等では二五―三〇日、国光では少くも収穫の四〇日位前には除袋しなければ十分な着色を望むことは出来ない。

(2) 日焼の発生し易い条件

日焼は除袋時、果実の表面が急に強い光線に晒されることによつて起る障害である。これは著しく外観を悪くし、激しい時は腐敗果発生の原因になり甚だ市場価値を低下させるから、除袋の際は十分注意しなければならぬ。この日焼は空気中の湿度の高い、温度の低い時に、急に強い光線を受けると発生し易い。従つて、曇天続きの時を選んで除袋することが望ましい。晴天日の除袋は樹冠の周囲や樹の頂部など、光の強く当る部分は午前一〇時から午後三時位迄の間に行い、朝や夕方は出来るだけ避けるがよい。労力などの関係から止むを得ず行わねばならぬ場合は、下枝等比較的に陰になつている部分の除袋を行うがよい。

専門業者の中にも朝夕の光線の弱い時に除袋すると、日焼が少いかの様に信じている向もあるから御注意願いたい。

手間は多少かかるが最初袋の下半分を破り、上方に浮かせて置き、その後三―四日して完全に除袋する様にすれば最も安全である。又旭の様に果梗(ツル)の短い品種は、袋の切れ端を少しでも残すと、その部分が殆ど着色しないので、販売に当つて不利を招くから注意しなければならない。

収穫に当つての注意

収穫の時期は果皮の地色、又は開花期からの日数をにらみ合せて、適期を誤らぬようにすることが肝心である。未熟のものを収穫したのでは紅玉では「斑点病」(ジョナサンスポット)、デリシャス等では「苦痘病」(ピッタービット)等の生理障害が多くなる。反対に遅過ぎると落果が多くなり、更に貯蔵中の障害、例えば「ゴム病」や紅玉等には「茶星」が多発する。開花期を基準にしてりんごの収穫期を決める場合の目安は祝八五―九五、旭一〇―二〇日、紅玉及びデリシャス一四〇―一五〇日、ゴールデンデリシャス一四五―一五五日、国光及び印度一七〇―一八〇日を標準とする。

ぶどうのカメルス等は一応着色はしても、その後三週間位を経過しなければ完熟する迄に至らない。ぶどうの収穫には検糖器を用い、糖度を確かめてから採集する位の注意が必要である。何の果樹を問わず、早生種は枝によつて熟度がまちまちで、落果し易いものであるから、十分着色し完熟したのから二―三回に分けて収穫すべきである。

競争の激しい今日、市場値がよいからと

言つて、未熟果を出荷し一旦信用を失つて了うと、全くとり返しのつかないことになる。

当然のことながら収穫、出荷に際しては出来るだけ鄭重に取扱う事が大切で、特に貯蔵品種には注意しなければならない。

台風対策

以前は台風被害の少かつた北海道でも、最近では一度や二度は必ずヒヤヒヤさせられる事態が起る。自然の威大な力の前には如何ともし難い面も多いが、人力の限りを尽して、被害を最小限に食い止める準備が必要である。

(1) 原始的な方法の様であるが、支柱の効果が大い。但し下り枝を吊る場合は、相当ゆとりを持たせて置くべきで、強く絞め付け過ぎると却つて落果の被害が多くなる。

(2) 台風の危険性の最も多い二百十日―二百二十日頃迄に、草生園は勿論であるが、清耕法を行つてゐる園に於ても草を或程度伸ばして、落果実の打傷を少くする様にすることがよい。消極的な様に見えるが予想以上に効果のあるものである。又草を生やす事自体は、秋の雨の多い時期を控え、草に余剰水分を吸収させて、果実の着色熟期を促進するのにも役立つのである。

(3) 前号にも一寸触れたが、台風シーズンを控え、二・四・五・T P等のホルモン剤を散布(果実にかからなければ効果がない)すると落果防止に効果がある、落果が予想される一週間位前に散布して、それで十分間に合うのである。(北大 T・T)



タマネギの収穫

タマネギは九月上・中旬、ちようど茎葉の倒伏後二週間くらいたつころ収穫に入る。収穫する日は晴天の日を選び玉を引き抜いて首の上部の葉を一すくくらい残して切りとり、根も取り去つて玉を日にあててさつと乾燥する。夕方には乾燥枠（竹であんだ簧の子か板で周囲をかこみ、下方は風が通るよう三〇〜四五すくくらい台をして上げた枠）に入れて約三〇日くらい乾燥し、順次選別して販売しながら十一月上・中旬までそこで保存する。

生育が遅れたり、八月下旬多湿、低温の場合に倒伏がおくれるようなこともあり、茎を折つて無理に倒伏させるようなことも見受けられるが、玉のしまりは良くなく貯蔵も長く保たない。

トウモロコシ稈の利用

トウモロコシも早生から順次収穫されて穂のついてない株は枯れないうちに、早めに刈取り、牛や馬の飼料として利用する。ゴールドエンクロスパンタムのように茎の伸びて収穫期の揃うものは、畑に立てて枯らすよりは、早めに刈取つてエンシレージに切り込むようにする。

カンランの早期結球について

中晩生のカンランといつても、パンダゴ一の特におそい系統を除いては、大体下種後一五〇日くらいで結球期に入る系統が多く市販されているので、四月中に下種されたものは、九月中から結球期に入る。特に

夏期高温で乾草に過ぎると、結球を急ぎ秋の需要期に入る前に固く結球する場合が往々起りがちである。結球の良い系統ほど破球が早く外葉が傷みやすく処理に困るものであつて、このような場合には、裂球する前に株を軽く掘り上げるか外葉を落して生育を底止させると、一〇〜二〇日はそのまま圃場におくことができる。

苗の定植

植付次年度の収量を、ある程度得るためには、なるべく良い苗を早く植付けすることが大切である。例年収穫終了後八月下旬にかけて、高温乾燥のためにランナーの発生が遅れ、九月上・中旬にならないと良い苗ができないので植付けはどうしても遅れがちになる。ランナーは親株の栄養状態に支配され、大体八月中旬ころまでに十分施肥した親株のランナーは花梗数も増えるといわれている。従つて植付次年度から収量を期待するにはなるべく早めに収穫を打ち切り、敷葉を除き施肥、中耕などに努めて、素質の良いランナーをえるようにしなければならぬ。大体一株から五〜一〇株のランナーがえられるから、丁寧に掘り取つて、九月上・中旬に早めに植付けるようにする。

苺の花芽分化は北海道で、九月二十日ころから始まるといわれるので、この時期には活着して新葉がどしどしできるよう肥培に努めると、翌春の花梗数も倍から三倍に増えるものである。

植付け距離は畦幅七五すく〜一〇〇すく、株間を二四すくから三〇すくくらい必要で、翌年の収量を増すためにさらに畦の中に一列く

らい植付け、収穫後けずるといふ方法も一部で行われている。

苺の促成用圃場の準備

促成のためのビニール被覆栽培がかなり増えてきているが、大部分は古株を利用してはいるようである。古株は株当りの花房数は多いが、葉数も多くなるので徒長しやすく、管理（ビニールの開閉など）も面倒になり、成熟期も一年株にくらべ四日から七日くらいおくれる。従つてトンネル栽培には一年株を利用するのが得策であつて、前述の苗の良否、植付期が特に重要な問題になつてくる。（フェアファックスのような品種は特に一番花が大きくなるから）初期の収量は花房数によつて左右されるといつても良い。それでできれば七月中に発生したランナーを苗床に仮植して保護し、十分肥培したものを植付けるようにする。

植付の場所は風当りの少い場所を選ぶのは勿論、春先トンネルの被覆が早ければ早いだけ着果が促進できるので、融雪の早いところで除雪の便利な場所に短冊型に植付ける。植付けの間隔は使用するビニールの幅によつて異なるけれども、一三五すく幅のビニールを利用する場合、二〇すく間隔の三条植えが良いようである。勿論植付けに当つては、露地のものより一層丁寧になるべく根の土を落さないように鉢取りして植付ける。

ハクサイの結球について

ハクサイは九月中旬ころに大きな葉が展開して、畑に足の踏入れる場所がなくなるくらい肥培に努めないと立派な結球を収穫

することができない、と前号に書いたけれども、ハクサイの結球の原理について、ここで少し述べてみたいと思う。

大体ハクサイはつきぎと大型の葉が中心から伸びてきて、一〇数枚になると結球にか、葉の大きさに差があるけれども、内部に重なりあつて結球を形づくるもので、松島系は一枚一枚の葉は重くないが何枚も重なりあつて葉数が多く、三〇枚くらいの葉で球を形づくるといわれている。

ハクサイが結球するためには、前述のように生育の状態によつて異なるけれども、光線とホルモンが関係するものといわれている。従つて秋末になり、光線が少くなつて来ると葉が立つようになつてきて、結球に入るもので、結球の思わしくない株は葉で外側をしばつてやると結球がやや進むのはこのためである

(なかはらただお)

編集部註

今月は編集の都合により「季節の作業」飼料作物の部々を省略させていただきましたのでご諒承下さい。

